

# ロールシャッハ・テストにおける対人関係的側面

中京大学心理学部 明翫 光宜<sup>注1</sup>

## The relatedness of Rorschach-test situation

MYOGAN, Mitsunori (School of Psychology, Chukyo University)

The author introduced the relatedness of Rorschach-test situation using Schachtel's theory and the present knowledge. The relatedness of Rorschach-test situation consists of the following part.

- (1) The Testee's subjective experience and definition in "Free association".
- (2) The relationship between Testee's subjective experience and definition and Test performance.
- (3) The Testee's subjective experience and definition in "Inquiry".
- (4) The Influence of Tester's personality.

The author discussed the necessary to take account of The Testee's subjective experience in Rorschach-test situation.

## 1. はじめに

ロールシャッハ・テストは個別式の心理検査であり、検査者と被検者の2者によって検査状況が構成されている。そして、検査者と被検者の役割は大きくには以下のように規定されている。

### ・自由反応段階

- (1) 検査者は、自由段階の教示をして、被検者に曖昧図形を持つ図版を渡し、「それが何に見えるか？」を問う。
- (2) 被検者は、図版を受け取り、それが何に見えるかを見立て、言語で伝える。
- (3) 検査者は、被検者の言動を傾聴し、記録として書き取る。

### ・質疑段階

- (1) 検査者は、被検者にこれからの作業（質疑段階）の教示をして、「どこに見えたのか（領域）」、「どんな特徴からそう見えたのか（決定因）」について聞いていく。
- (2) 被検者は、反応形成の過程を内省し、知覚理由（領域や決定因）を言語化する。

これらは、一見単純な役割に見えるが、この関係の場に実に様々な力動が展開される。それは、被検者の基本的な行動様式や対人関係の志向性が、ロールシャッハ・テスト状況（以下ロールシャッハ状況とする）でいかに振舞うかという側面に影響を与え

るからである（Weiner, 1998）。つまり、被検者のパーソナリティ機能についての仮説を立てる際に、被検者の狭義のロールシャッハ反応だけでなく、ロールシャッハ状況における対人関係的側面にも注目することが心理査定をより豊かに出来ると考えられる（Weiner, 1998）。

ロールシャッハ状況における対人関係的側面は何人かの研究者による指摘があるが、対人関係という複雑な側面のためか、ロールシャッハ研究の中では中心的な位置を占めてこなかった。それゆえに、この対人関係的側面は重要な研究課題でありつつも、否定的な見解を持つ検査者、あるいは逆に名人芸的解釈に向かう検査者に分かれるのではないだろうか（片口, 1987）。そこで本論は、ロールシャッハ状況の対人関係的側面について筆者なりに整理を行うことで、ロールシャッハ解釈の一助としたい。

## 2. Schachtel によるロールシャッハ状況の精神力動的理解

ロールシャッハ状況の対人関係的側面は、主に精神分析学に依拠する研究者によって注目されてきた。特に先駆的な役割を果たした研究は、対人関係学派の精神分析家である Schachtel (1966) の研究である。以下、Schachtel (1966) の研究を中心に紹介する。

注1 m-myogan@cnc.chukyo-u.ac.jp

(1) 被検者のロールシャッハ状況における主観的体験

まず, Schachtel (1966) は被検者のロールシャッハ状況における主観的体験の重要性について述べている。それは, 被検者の主観的体験を「客観的な結果を混乱させるもの」ではなく, 「被検者の人格構造や態度を考察するための貴重な資料」として注目することである。

被検者の主観的体験は, ロールシャッハ状況における行動を規定する。心理検査を受ける際に, 被検者はたいてい(意識的には)その検査から何らかの助けを得たいと思っている。しかし, 無意識的にはこれとは異なる動きが生じることがある。例えば, 「満点を取らなければいけない試験」, 「未知のライバルとの競争場面」, 「未知の人物像の非難から自分を防衛しなければいけない試練」, 「検査者を打ち負さないといけない競争場面」などのように, 被検者は知らず知らずのうちにロールシャッハ状況を主観的に規定している。

一方, ロールシャッハ状況における客観的要素を挙げると以下ようになる。

- (a) 検査者と被検者という2人の人間が一緒にいる。
- (b) 検査者によって課題が与えられ, それによって2人の関係性が規定される。
- (c) 検査者が, 検査結果から被検者に関する何らかの結論を引き出すということを被検者は常に意識している。
- (d) テスト課題が特殊であること。それは, 「刺激材料であるインクプロットが見慣れない漠然としたものであること」, 「検査のルールや方法が比較的不明瞭であること(自由度が高い)」に基づいている。つまり, ロールシャッハ・テストの課題は, 他の多くの検査と異なり, 被検者は型にはまった方法を用いることが難しいのである。

以上の点をロールシャッハ・テストに存在する客観的な要素と捉えると, ロールシャッハ状況は被検者が自分の体験したままに感情や要求, 恐怖などを投入する場面であって, 検査者はその感情が検査状況を規定することに気づいている必要があると Schachtel は指摘する。また, Rorschach は, M型(内向型)の人はロールシャッハ・テストを「遊び」と, C型(外拡型)の人は「仕事」ととらえていた(Rorschach, 1921; 鈴木訳, 1998, p. 83)。例えば, ロールシャッハ・テストを非常に真面目に

受け取る人は, 生活のあらゆることを真面目に受け取るという(Rorschach, 1921; 鈴木訳, 1998, p. 46)。ここから, Rorschach はテスト状況における被検者の態度は, 日常生活での振る舞いが反映されると感じていたのであろう。しかし, Rorschach はその主観的体験を明確にすることまではしなかった。Schachtel は, その点に注目し, 被検者の「生活史での経験によって形成され, 人格構造の一部になっている態度, 志向, 防衛, 欲求, 恐れ, 希望, 関心」などがロールシャッハ状況に移し変えられると考えた(精神分析の転移に相当する)。さらに Schachtel は, ロールシャッハ状況に対する典型的態度をいくつか挙げて考察した。

植元(1964)はロールシャッハ・テストの「基本的要求」として Schachtel と同様のことを考えている。

図版が被検者に提示され, テスト教示を受けたときに, 被検者はまず1つの要求(drive)を持つに違いない。それは「答えようとする要求」である。このようにして被検者は刺激に対して創造を行うべく, 己を投じる。力動的に見れば, 対外的には承認されたいという要求があり, 精神内界においては満足する創造を成し遂げたいという満足感が起こると考えたい(植元, 1964)。

別の視点から Schafer (1954) はロールシャッハ状況における心理的負荷の体験として, 以下のことをあげている。被検者の「検査されるという力動」についての理解である。

- 信頼関係が不十分なまま親密なコミュニケーションを行い, プライバシーが侵害されること(検査者にみられる立場)。
- 関係性の主導権を相手に譲り渡すこと(検査の進行を管理される立場)。
- 自分の問題を直面化する危険性(隠されていた自分の問題が明らかにされるかもしれないという立場)。
- 退行への誘惑や自由の危険性(曖昧な状況にさらされる立場)。

Schafer と Schachtel の知見は, 当時主流であった欲動論, 自我心理学, 対人関係論の影響を大きく受けている。その後, 精神分析は対象関係論と自己心理学へと領域を広げ, ロールシャッハ状況における検査者-被検者関係の視点も広

がりを見せている。例えば、Lerner（1988）は対象関係論的な視点からロールシャッハ状況における転移・逆転移を考察しており、Arnou & Cooper（1988）は、Kohutの自己心理学的な視点を取り入れ、自己対象転移がロールシャッハ状況においても生じることを示している。

## (2) 権威主義

被検者の生活における何らかの権威が、ロールシャッハ状況に大きな影響を及ぼす（不合理な権威に対する恐れ、服従、賞賛、反抗など）。それは、ロールシャッハ状況にその人の権威に対する態度、志向、欲求、恐れを強める要素（客観的要素を参照）があるためである。特に臨床場面における検査者と被検者との関係性は、ある側面では精神分析での分析家と被分析者との初回面接における関係性と同じである。この場合、被分析者は分析家に対して、不合理な権威を投影し、検査者に反応するのではなく、その投影したものに反応することが多い（転移）。

被検者が権威に依存的な場合、被検者は検査を「判定される試験」として体験する傾向が強くなる。ロールシャッハ状況の共通の要素として、(a)検査が1つの圧力のかかった状況として体験されること、(b)通常とは異なった法則・指示・制限・基準によって規定されていることの2点があり、ロールシャッハ反応や検査行動に大きく影響を及ぼす。例えば、権威に敏感かつ依存的な被検者は、ロールシャッハ状況という比較的自由的な状況を、自分が仮定した権威者像の要求や期待・禁止に沿って進める。つまり、被検者は自発的に何かを行うのではなく、他者の期待に沿って行動しないとイケないと思いつめるのである。この場合、検査者－被検者間の関係性はパラタクシク<sup>3</sup>になる。中心となる権威は、検査者に投影する権威のイメージ（外的権威）と被検者の超自我にあたる（内的権威）の2つあり、相互に補足し合っている。

権威に依存的な被検者がロールシャッハ状況で感じる圧力は、「(自らがその状況に導入した)要請や基準に応えられなかったら、どういふことが起きるのか(どういふことを意味するのか)」という考えから引き出される。そもそもロールシャッハ・テストは、パーソナリティ・テストであって成功－不成功という概念は当てはまらない。しかし、この概念は被検者の生活に密接に関係しているために、ロー

ルシャッハ状況にも被検者の主観的体験として影響を及ぼすのである。

ロールシャッハ状況という規則や指示のない自由度の高い検査状況では、権威に依存的な被検者にとっては「自由に眼がくらむ」体験をする。そして被検者は、検査者がある特定の反応や行動を期待していると想像することによって、自己選択や自己決定の重荷を検査者に転嫁する。本来、被検者が自立的であるほど、ロールシャッハ状況を自分で構成することができ、ロールシャッハ反応は自分の選択・決断・行動の結果であると感じるが、被検者が依存的であるほど、自分は誰かが要求していることを行っているに過ぎず、他者やその場の状況が自分の動きを決定するのだと感じる。

## (3) 競争心

権威主義的な態度は、地位を獲得しようとする努力や競争心とも関連し、またロールシャッハ状況にも影響を与える。その競争心が不合理かつ神経症的で無分別な場合、ロールシャッハ状況で想像上の相手を含んだ対人関係の場になる（この競争は無意識的であることが多い）。競争心の強い被検者は（想像上の）相手よりも優れていることに関心が向く。彼らは、ロールシャッハ状況でも「ロールシャッハ反応の中で重要なことは何か?」、「どんな基準で評定されるか?」などについて何らかの考えを持つことで、他者のロールシャッハ反応を想定し、それを越えるように試みる。量的野心（自分の想像力、熱心さ、観察の鋭さなどが無限にあることを示そうとする態度）と質的野心（反応を1つ1つ完全なものに仕上げようとする態度）は、ロールシャッハ状況を競争事態と見なすことから生じる。

被検者の対処スタイルのあり方として、ロールシャッハ・テストという課題場面、あるいは圧倒的な状況を、量的野心か質的野心という方向性で克服しようと試みている。植元ら（1968）の反応レベルの概念では、反応限定型にあたる。競争心という概念は、被検者の強迫的防衛の背景や体験世界を説明する概念として有効であると考えられる。

## (4) 反抗的態度

ロールシャッハ状況の反抗的に規定することは、権威主義や競争心による規定と密接な関係がある。

それは、被検者がロールシャッハ状況で期待されていることを主観的には理解しているにも関わらず、逆の反応を示すからである。また意識的には積極的に協力しているように見えるが、無意識的には抵抗を示す被検者も存在する。その他の抵抗を示す人は、この両端の間に位置し、ロールシャッハ状況に対してアンビバレントな態度を含んでいることが多い。

検査者に対して優位に立とうとする場合は、検査者が持っているような目的に対して「こんなことを私にしても意味がないでしょう」という態度を示すことで検査場を壊そうと試みる。また、検査に協力しても出来るだけロールシャッハ・テストに自我関与しないように試みる（ロールシャッハ反応では特に人間反応の減少が認められる）。被検者はロールシャッハ・テストが1つの審判や裁判であると想定し、被検者はどんなことを見つけれられても自分にとって不利になるので検査者に何も見つけ出されないように用心する。これは精神分析のある側面に本質的に同じである。それは、分析家よりも優位に立ちたいという被分析者の強迫的な欲求が、援助を求める気持ちよりも一時的に強くなっている力動である。

Schachtel (1950) は、従来の形式分析では非行少年と正常少年との人格構造の動機力動性の特徴を捉えることが困難であると指摘し、分析の重点を検査状況における対人関係の評定に置いたロールシャッハ特性表を作成した (Table 1)。この特性表の分析方法に、本論で紹介している Schachtel の対人関係の考えが基礎になっている。

Schachtel は、非行少年の特性が「反抗的態度」に反映されていたとして、このタイプの動機に注目していた (Schachtel は非行少年と正常少年のロールシャッハ反応の目隠し分析で驚くほどの適中率を示している)。

(5) 被検者のロールシャッハ状況の主観的規定とスコアとの関連

(a) 反応数

特に反応数が非常に少なかったり (15 個以下)、非常に多かったりする場合 (60 個以上)、被検者のロールシャッハ状況に対する主観的体験によって影響されていると考えられる。例えば、競争心の強い被検者は、量的な側面で優位に立ちたいと思う場合は反応数が多くなるし、質的な側面で良い反応をし

たいと思う場合は反応数が少なくなると考えられる。反抗的な態度を持つ被検者は、検査者よりも優位に立ったり、無意識的抵抗として冷淡に検査を受けるので、反応数は少なくなることが多い。

その他、抑うつ気分は、視覚の受容性や活動性を弱める。さらに検査状況も生活状況と同じ厄介なもので解決のない重苦しいものとして体験される。このような態度は当然反応数を少なくさせる。

反対に爽快な気分は、生活への興味、体験能力を広げ、ロールシャッハ・テストは解決可能であるという自信を抱かせるため、反応数は増加する。

(b) 反応時間

反応時間も被検者の主観的規定の影響を強く受ける。いくつかの特徴を列挙すると以下ようになる。

- 抑うつ状態では反応時間が長くなる。一方、躁病の場合は反応時間が短くなる
- 自我防衛のため、ある一定の反応の仕方を作り上げないといけなくなる場合、反応時間は長くなる。
- 反応の構えが非常に固くて狭い場合に反応時間の影響が起こる。例えば、W 反応傾向の場合、ふさわしい反応が見つかることが出来ないと反応に遅れが生じる。また性反応の着想が初発反応を遅らせることもある。
- 反応の締めくくり、つまり最後の反応から図版を置く (または返す) までの時間も参考になる。この時間の長さが各図版に規則的に見られる場合は、産出した反応よりも多くの反応を出さないといけないという圧力や不全感を示す。おそらく被検者の持っている権威像が関与している。
- 「反応拒否が生じた図版」や「不満足な反応しか出せなかった図版」での反応時間と「反応に成功できたと感じている図版」での反応時間の比較は、被検者の成功や失敗の主観的体験や観念の流れが止まった際に努力しないといけないという圧力を、どの程度感じているかについて手がかりを与えてくれる。

(c) 継起型

継起型はロールシャッハ課題に対する自分の行動を組織化する方法であると考えられる。従って、被検者の主観的規定と継起型とは深い関連があると考えられる。それは、検査状況の主観的体験がロールシャッハ状況に対する対処法やそれを実行する程度

Table 1 Schachtel のロールシャッハ特性表

氏名：		日時：		分析者：		No.:		符 号		
								+	(1)	特性あり
ロ ー ル シ ャ ッ ハ 特 性 分 析								-	(2)	特性なし
								?	(3)	疑わしい
								U	(4)	不 明
権威と社会に対する基本的態度				若干のパーソナリティの一般的性質						
1	自己主張	28	情緒易変性, 衝動性							
2	社会的主張	29	自己統御							
3	反抗性	30	強迫的傾向 (硬直性)							
4	破壊性	31	外向的傾向優越							
5	自己愛傾向	32	内向的傾向優越							
6	服従性	33	活気のあること							
不安定感, 不安感, 劣等感, 欲求阻止				知 能						
7	一般的な漠然な或いは無意識の不安定感, 不安感	34	独創性							
8	高められた不安定感, 不安感	35	創造性							
9	喜ばれない, または愛されない	36	平凡性							
10	世話されない	37	観察力							
11	まじめに受取られない, またはあてにされない	38	現実的思考							
12	認められない	39	非現実的思考							
13	無援と無力	40	常識							
14	失敗と敗退の恐怖	41	直観							
15	怨恨	42	空想							
16	あきらめ	43	言語的に過ぎる知能							
17	被虐症的傾向	44	計画的							
18	抑鬱的傾向	45	混乱, 錯雑							
親 切 と 敵 意				46 客観的興味に対する潜在的能力						
19	普通または良い他人との表面的接触	依 存 性 と 独 立 性								
20	協力	47	他人への依存							
21	親切と信頼	48	他人の期待に応ずることの歪力							
22	他人との接触の困難	49	習俗性 (観念, 感情, 行動における)							
23	過度の闘争的態度	50	被暗示性							
24	敵意	51	自発性							
25	疑惑	52	生活を処理し得る感							
26	孤独	欲 動 の 目 標								
27	防衛的態度	53	受容的 (口愛的) 傾向							
		54	破壊的加虐症的傾向							
55 診 断										
56 予 後										
順調 (1)				順調ならず (3)						
制限付順調 (2)				意見なし (4)						
有効な処置についての意見										

(Schachtel, 1950, 法務総合研究所訳 1961, p. 411 を筆者が一部変更して引用)

を規定するからである。例えば、混乱型は自分の行動をほとんど組織化しないと推測することが出来るし、厳密な継起型は被検者自身が課したルールの1つと考えられ、権威に対する依存を推測することができる。

#### (d) 形態水準

形態水準は、継起型と同様に被検者の意思によって左右されるもので、知的作用の要素を持っている。与えられた仕事を秩序にしたがって行う方法（継起型）と知覚の正確さ（形態水準）は、両方とも高度で意識的な知的作用によるものである。これらの知的作用は多少とも自動的・習慣的に作用する。学齢期を通して、子どもたちは秩序だった方法で正確に注意集中して課題を行うことを訓練しているからである。被検者が、ロールシャッハ状況を（被検者が持っている）権威によって身近な学校場面に見立てて作業を行う場合、形態水準は高くなると考えられる。

Schachtel は、抑うつ的な人、衛学的な人に注目し、彼らの体験世界についても述べている。彼らは、自分を世界や自分を取り巻く環境の一部ではなく、完全に分離され、外からの力が脅威であるように感じる。この離絶感、孤独感、疎外感が共通特性となり、ロールシャッハ・テストでは形態水準の高さだけでなく、貧困な体験型にも表れる。彼らにとってロールシャッハ状況は新奇で脅威な体験となりうる。抑うつ的な人は、この新奇で脅威的な場面に対してそれに対処できないと無力感を抱く。一方、衛学的な人は（彼らが想定する）ロールシャッハ状況の規則や形式を見つけ、自分の使い慣れたものに当てはめる（脅威に対する防衛）。

#### (e) 把握様式

認知様式の継起（継起型）だけではなく、認知様式そのものもまた被検者のロールシャッハ状況の受け取り方によって影響を受ける。

W 傾向では、典型的な反応様式では各図版に1個のW反応を産出し、全図版で10個の反応をする。Rorschach は、この反応型を示す被検者のほとんどはロールシャッハ・テストを抽象し、統合する力を見るためのものではないかと捉え、良い反応を出して良い評価を得ようとしていると考えた。特にW+反応は状況の要請に服従する形での野心、積極的な意欲、完全主義、自己愛などが入り混じっ

ていると考えられる。

Dd 反応の中でも小部分反応(d)は、以下の2つの態度があると考えられる。1つは、量的野心の構えがある場合である。この態度の背景には競争心や権威の影響があり、想像力や創造力、探索力が制限される結果、限られた数を持つWやD領域に多様な反応をすることが出来ず、Dd領域を増やすことで自分の能力を主張する。もう1つは特殊な正確さ、物事の細やかさ、些細な点への関心がある場合である。この場合は、状況、問題、体験などの本質を扱わず、小さいことにこだわり、ちょっとした欠陥にこだわる。この態度を示す被検者は、ロールシャッハ状況からある種の権威を受け取り、服従すると同時に、権威に反抗するために本質的な側面に反応しないで些細な部分に拘泥することで自分主張をする。2種類のDd反応の産出に共通することは、「直接的な自己主張の代償」や「ロールシャッハ状況から受ける不安や不全感に対する防衛操作」であると考えられる。

#### (f) 反応内容

反応内容も被検者のロールシャッハ状況の受け取り方によって直接影響されることが多い。その状況の受け取り方によって、ある特定の内容が選ばれたり、強調されたり、ある種の内容が排斥されたり、否認されたりすることが考えられる。

第一に、性的内容（Sex反応）の意識的な抑制である。被検者は、ロールシャッハ状況に性的内容を持ち込んではずいと見なし、ちょうど逆の反応をする。

第二に、解剖学、生物学、地理学、芸術である。被検者はロールシャッハ状況を権威的あるいは競争的に受け取ると、権威者の基準や想像上の基準に有利な反応内容を選びやすい。現在、包括システムでは芸術反応、人類学反応、抽象反応を知性化指標を構成する変数として採用している。

第三に、中性的で非個人的な反応である。これは被検者がロールシャッハ状況に対して「しっぽをつかまletakくない」という構え（防衛）が強く働いているときに、反応を曖昧なものに限定しやすい。この場合、人間反応は減少するか、全く出されないことが多い。

ロールシャッハ変数は、被検者の主観的規定によって影響を受ける。つまり、被検者の主観的規定を考慮しながら解釈することは、その反応が持っている、その被検者にとっての意味を理解すること（上芝，2007）につながる。以下、ロールシャッハ状況によって解釈の意味が異なる反応について示す。

①反応数の少なさ（高橋・高橋・西尾，1998）

- 検査場面を権威的に受け取り，自己暴露への恐れに対する防衛的態度を示す。
- 不慣れな場面を回避する被検者であり，不安や緊張を示しやすい性格を示す。
- 抑うつ気分による意欲の減退
- 生活空間の狭さや可塑性の欠如
- 知能の低さ

②ハイラムダ（形態反応の高いプロトコル）

（高橋・高橋・西尾，1998）

- 問題解決を回避しようとする逃避的態度や防衛的態度
- 傍観者の態度や非個人的行動
- 現在に関心が強い
- 自発性・創造性・感受性に欠いている
- 自分の状態や外界の細かいニュアンスを正確に把握できず，可塑性を欠き，固執的な思考や行動

③人間反応の少なさ（高橋・高橋・西尾，1998）

- 抑うつ気分
- 他者への関心の低さ
- 敵意

④解剖反応（At）（上芝，2007）

- 身体への関心が強い場合や医者・看護師に出現しやすい
- 漠然とした考え方（内臓は不定形であることが多いので，認知がシャープでなくても出せる反応）
- 自閉的な思考や関心（関心や興味の幅が狭まっていった結果，身体は自分の身近にある内臓部分に関心が向く場合）
- 知的劣等感の補償

⑤性反応（上芝，2007）

- 性的コンプレックスの存在。この場合は，遠慮がちに遅く出たり，Atに変装して出たり，

見ていながら否定したりすることが多い。

- 社会のタブーを軽視するとか，無視する意味から，非社会性や反社会性を反映する。
- Sexは本能的・原初的なものであり，性器は自分の体の一部でもあるから，人格水準が相当下がって，退行したり，自閉的になったりした場合に出現することがある。

(g) 間接的な影響を受ける要因

ロールシャッハ状況が上記のように直接ロールシャッハ反応に影響を与える場合と，間接的に影響を与える場合がある。

決定因では，形態反応，運動反応，色彩反応などは，ロールシャッハ状況で受けるショック，抑圧などの影響を間接的に受ける。その中でも濃淡反応はこれらの決定因とは性質が少し異なっている。

濃淡反応は形態反応と同じく総反応数の増加とは釣り合わないほどの比率で増加することがしばしば観察される。濃淡反応の性質として，出来るだけ多くの反応を出そうとする構えて反応を探し出す場合，形態反応と濃淡反応の方が色彩反応や運動反応よりも見つけやすい。なぜなら，色彩反応は1色に塗りつぶされたプロットの全部か全体に対して反応するためD領域となるが，濃淡反応は濃淡のある細かい領域に対して反応するため（無数に存在する）Dd領域となるためである。さらに濃淡反応の背景にある態度として「濃淡の中のごく小さいものを見つけ出す」ことが多いのに対して，色彩反応は「色彩の効果によって印象付けられ影響される（受動性）」からである。運動反応は原則Dd領域ではなくWやD領域に生じる。そのため，被検者がロールシャッハ状況に対して量的野心の構えがあると濃淡反応が増加することがある。

反応内容では，紋切り型の反応内容，概念の貧困さがある。これらは想像力の貧困さに代表される知的水準の低さだけではなく，緊張の強さ，防衛的な態度，何らかの原因で生じる固い態度が自由な連想を妨げている場合もある。

これまで被検者の主観的規定によって変化するロールシャッハ状況の側面に注目してきたが，検査状況によって変わりにくい側面もあることに注目しておく必要がある。以下の図（Figure 1）をもとに概説したい。

辻 (1997) によれば、外界といえる検査状況の影響のもとで、被検者の内界にはそれに対応した内的状況が生まれる。一方、被検者の内界の核心にはそれまでの積み重ねによって形成されてきた比較的恒常的な準備性が存在している。

被検者の核心にある準備性は、関わる対象や状況そのものよりも、その対象や状況が持っている性質に対して反応していると考えられる。それゆえに、たとえ現実の対象や状況が変化したとしても、それらがもっている性質が同一あるいは類似している場合、核心にある準備性が示す反応はほぼ同じである。辻 (1997) の形式構造解析では、この核心の準備性の様態を詳細に捉える。

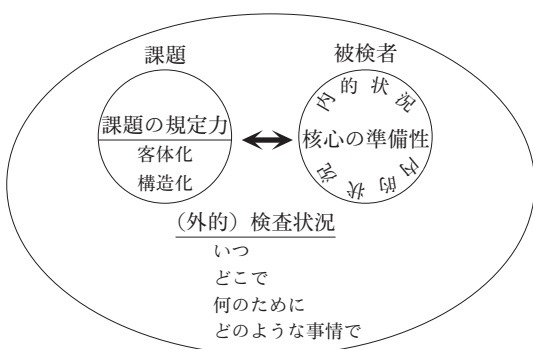


Figure 1 検査状況の構造  
(辻, 1997, p. 170 より引用)

### (6) 質疑段階の主観的体験

質疑段階では、被検者は反応について説明し、詳しく述べることが求められる。同時に自由反応段階からの流れが壊される。この変化における被検者の主観的体験やその変化の受け取り方に注目することも被検者の人格理解に重要であると考えられる。

#### ・攻撃、批判、釈明要求の場 (防衛的反応)

被検者は、質問段階を反応について釈明し、正当化する場と受け取る場合が非常に多い。検査導入の際に、彼らは自分の見たものはそれで良いと信じさせられるが、質疑段階に入ると自分の見たもの (反応) を説明しないとイケない状況になる。被検者は、この状況の変化を「検査者が自分の反応に何か疑問を感じたに違いない」と受け取る。その結果、被検者は必然的に自分の反応の正しさを示すように努める。罪悪感や劣等感を抱いている被検者は、最初は多少それらしく思えた漠然としたイメージ (反応)

が、冷酷的、批判的に見られると突然にその類似性を失うために当惑してしまう。時にはこの態度の変化が大きいために反応をもちや認めなくなってしまうこともある。上芝 (2007) は、このような被検者の質段階での体験に注目し、臨床的な配慮が必要であると指摘している。

一般的な結果は「抑制」である。抑制は、より注意深く、正確でなくてはならないという方向に働くこともあれば、自分の反応を防衛し、より良いものにしなくてはならないという方向に働くこともある。それは、また質疑反応での追加反応に結びつくこともある。

#### ・検査者との接触を再保証し、支持や再確認を求める場 (支持獲得反応)

自分の思い通りに振舞える状況 (自由反応段階) において無力感や不安感、緊張を感じる被検者は、質疑段階を支持や再確認の場として受け取る。質疑のやり取りから、彼らは検査者が求めている物の手がかりを得たり、やり取りそのものから検査者と親密な関係にあることが再保証の効果を持つ。このタイプの被検者は、質疑段階になると検査者からの支持もあり、自由反応よりも反応が容易になり、個人的な意味のある仕方で追加反応が増加することもある。

#### ・質疑段階におけるコミュニケーションの障害

被検者が自己中心的な考え方を持っている場合、誰もが自分と同じ見方をするはずだから、自分が見たもの (反応) は誰にでも明白なはずだと考える。その際、被検者は反応に対する質疑が厄介で、検査者が鈍感であると感じる。また被検者が、独りよがりな方法で自己を表出するために、自分では伝達していると確信しているが客観的には伝達が出来ていない場合がある。この場合、被検者は自分の言っていることが理解してもらえないと感じて落胆や怒りを示すこともある。これらの場合、被検者は、検査者が愚かであるために自分の言ったことが理解できなと感じて、質問を厄介に感じるだけでなく、困惑や横柄な態度、絶望、不安までのあらゆる反応を示す。

### (7) 検査者の要因

検査者の態度が温かく友好的な態度を取るか、冷たくて厳しい態度を取るかで、被検者のロールシャハ状況の受け取り方が変わると考えられる。Schafer (1954) は、検査者の人格を分類して



Table 2 のように述べている。

また検査者側の人格特性や態度は同じであっても、被検者の人格の差異によって違った効果を及ぼすこともある。例えば、友好的で外向的な感情表出をする検査者は、積極的に自分を出したいという欲求を持っている人には元気付ける効果を持つが、分裂気質の被検者や妄想的な被検者、統合失調症患者には脅威な体験となり、彼らを引っ込み思案にさせて反応を貧弱なものにする結果となりうる。

逆に控えめな検査者は、ある被検者には不安を起こさせる代わりに他の被検者には安心感を与え、より自由に自分を表出する機会を与える。

検査者の人格は、被検者や検査状況に影響を与えるだけではなく、検査者の行う解釈にも影響を及ぼす。例えばある検査者は、被検者の性質や葛藤のうち自分の生活に障害を生じさせているものと同じものを強調しがちである。新人の検査者は、あまりに熱心に病理的な指標を見つけ出そうとする結果、そのような病理がないようなプロトコルでもそれがあると思ってしまう。

ロールシャッハ状況では、被検者に不安を起こさせる要因について多く述べられてきた。しかし、ロールシャッハ状況には、不安を喚起させる側面の他に心理療法的側面もあることについて述べておきたい。

中村・中村（1988）によれば、検査者は、経

験を積んでくると「あからさまな感情表出を伴った反応者」から「被検者の反応に対して共感的な受容と理解を示す存在」へと変化していく。そのとき検査者の「え?」「おや?」「まさか?」のような驚嘆や落胆を示す検査者の反応は内なる声へとなる。それを広い意味で逆転移として捉えることが出来る。そこで、中村・中村（1988）は、境界例の女性に施行したロールシャッハ・テストのプロトコルを提示して、そこでの検査者と被検者のやり取りから検査者に生じる逆転移について内省し、その逆転移をテスト解釈に生かし、治療スタッフへの助言や対策案を練っておくといった援助的な視点についても考察している。

溝口・溝口（1988）は、ロールシャッハ・テストの共感過程について考察している。溝口・溝口（1988）は、共感の構成する要素として、(1)共にいること、(2)言語・非言語を通して理解すること、(3)融合と脱融合、(4)検査者の連想、の4つを挙げている。(3)に関して、反応している被検者の身になっている検査者は、被検者と融合したような状態になっている（追体験）。しかし、同時に検査者は客観的な目を持っている（観察自我）。ロールシャッハ状況は、融合と脱融合を体験しながら図版に向かい合う体験であると言える。

Table 2 検査者の人格と特徴

検査者の種類	特徴
アイデンティティが不確実な検査者	被検者の反応を支えにして自分の正常さを確立しようとする。あるいは、そのために被検者の探索しつつある自己像に対して鋭敏に反応する長所もある。
引っ込み思案の検査者	検査を人間関係の道具として用いる傾向がある。
依存的な検査者	被検者の反応を自分に対するプレゼントとして受け取るため、検査者は被検者の敵意を恐れ、立ち入った質問が出来なくなる。
依存欲求に固い防衛を持つ検査者	被検者を受動的な立場におき、自分は与える方の役割ばかりをとろうとする。防衛が敗れるときは急に依存的になるような行動化も考えられる。
固い知性化傾向を持つ検査者	あまりにも論理的で冷たい、抽象的すぎる欠点を持つ。
サディスティックな検査者	被検者の弱さを暴くことに喜びを見出す。しかし、被検者の欠点を欠点としてみるために観察眼を曇らせることがないという長所を持っている。
敵意の表現に対して固い防衛を持つ検査者	被検者に対してくよくよする傾向がある。これに対して被検者が応えないと感じたとき、自己愛的な性格を持った憎しみを被検者に対して抱くことがある。
マゾヒスティックな検査者	被検者の自己愛的な要求や不従順などをむしろ楽しむ傾向があり、検査場面のまとまりがなくなることもある。

(Schafer, 1954 ; 河合, 1975 を参考に筆者が作成)

### 3. 終わりに

Schachtelは、サインやサイコグラムについて以下のように警告している。「スコアやサイコグラム(つまり徴候)の各々が、いくつかの異なる心理力動を反映しているということになる。いくつかの徴候をからなる症候群(すなわちスコアやサイコグラムに含まれる種々の要因を含み、種々の方向から同一の心理力動を類推するわけだから、診断的価値は高いが)でさえ、いつも同じ原因から来ているとは限らず、したがって同じ意味を持っているとは限らない(Schachtel, 1966, 空井・上芝訳 1975, p. 350)」。

そして、Schachtelは、ロールシャッハ反応の中に見出されるごく些細な反応の意味も、ロールシャッハ状況における被検者の行動を観察することで明確に裏づけが出来ると指摘する。被検者の検査行動から、ロールシャッハ状況をどのように受け取っているかを理解することが出来る。

#### 注

a Sullivan (1953) は事象の内的加工に関わる体験様式を3種類に分類した。

プロタクシス：何か欠乏があると緊張を感じて欲求が生じ、それが緩和されると満足を感じる。この欲求と満足に基づく体験をプロタクシスという。乳児の断片的で時空間のない体験様式である。外界や自分に対する概念が統合されていくにつれて次第に減少していく。その後、この体験様式はパニック状態や悪夢、ある種の精神障害などの状態で出現するのみである。

パラタクシス：非連続的なプロタクシスの体験からパターンを見出し、統合し、シンボルとして操作する段階にある。ある人が他者を、自分の人生の別の時期に関わっていた他の誰かのように見なす場合をパラタクシス(体験様式の歪曲)という。パラタクシスの歪みが重篤な場合は、後の対人関係で困難な問題が引き起こされる。パラタクシスの歪みの起源は、その大部分が幼児期・児童期にさかのぼる。転移・逆転移に類似した概念である。

シンタクシス：周囲との対人関係を通して自分の象徴や言語の妥当性が確認された(合意による確認を経た)象徴-言語的な体験様式である。日常生活で起こる出来事を体験していく通常の体験様式である。

#### 文献

Arnou, D. & Cooper, S. 1988 Toward a Rorschach Psychology of the self. In Lerner, H. D., & Lerner,

P, M. (ed.) *Primitive Mental State and the Rorschach*. International Universities Press. Pp. 53-68.

片口安史 1987 新・心理診断法 金子書房。

河合隼雄 1975 面接法の意義 心理学研究法 11 東京大学出版。

Lerner, P. M. 1988 Rorschach measures of depression, the false self, and projective identification with narcissistic personality disorders. In Lerner, H. D., & Lerner, P, M. (ed.) *Primitive Mental State and the Rorschach*. International Universities Press. Pp. 71-94.

溝口純一・溝口るり子 1988 ロールシャッハ・テストと共感過程 秋谷たつ子 監修 ロールシャッハ法を学ぶ 金剛出版 Pp. 86-96.

中村伸一・中村紀子 1988 ロールシャッハ・テスト状況における逆転移反応をめぐる一境界例とのロールシャッハ・テストから 秋谷たつ子 監修 ロールシャッハ法を学ぶ 金剛出版 Pp. 97-110.

Rorschach, H. 1921 *Psychodiagnostik: Methodik und Ergebnisse eines wahrnehmungsdiagnostischen Experiments (Deutenlassen von Zufallsformen)*. 9 durchgesehene Aufl (Hans Huber 1972) (鈴木睦夫訳 1998 新・完訳 精神診断学 付 形態解釈実験の活用 金子書房)。

Sullivan, H, S 1953 *The Interpersonal theory of psychiatry*. Norton & Company (中井久夫・宮崎隆吉・高木敬三・鐘幹八郎訳 1990 精神医学は対人関係論である みすず書房)。

Schachtel, E. G. 1950 Some note on the use of the Rorschach test. In Glueck, S. & Glueck, E. *Unraveling juvenile delinquency*. Pp. 363-385 (法務総合研究所訳 1961 非行少年の解明 Pp. 363-385).

Schachtel, E. G. 1966 *Experiential foundations of Rorschach's test*. Basic Books, Inc (空井健三・上芝功博訳 1975 ロールシャッハ・テストの体験的基礎 みすず書房)。

Schafer, R 1954 *Psychoanalytic interpretation in Rorschach testing*. Gune & Stratton.

高橋雅春・高橋依子・西尾博行 1998 包括システムによるロールシャッハ解釈入門 金剛出版。

辻悟 1997 ロールシャッハ検査法：形式構造解析に基づく解釈の理論と実際 金子書房。

植元行男 1964 ロールシャッハ・テストを媒介として、思考、言語表現、反応態度をとらえる分析枠の考察とその精神病理研究上の意義 名古屋医学, 87 (1), 297-355 (ロールシャッハ研究, 15・16, 281-343 1974年に再録)。

植元行男・安藤公子・土川隆史・梅垣弘・長谷川悦子・須崎暁子・櫛田ますみ・川島佳子 1968 ロールシャッハ・テストを通じての登校拒否の精神病理学的考察 児童精神医学とその近接領域, 9 (4), 253-267.

Weiner, I. B. 1998 *Principles of Rorschach Interpretation*. Lawrence Erlbaum Associates Inc (秋谷たつ子・秋本倫子訳 2005 ロールシャッハ解釈の諸原則 みすず書房)。

(受理年月日 2007年10月4日)